

女性研究者のための スキルアップセミナー

～実施報告&女性研究者からのメッセージ～



英語論文の書き方： 考案のロジック



はじめに…

英語論文の考案の起承転結は日本語論文とは違います。

抜けの少ない考案の組み立て方を「考案箱」を使って学び、世界に通用する論文で、あなたの素晴らしい研究成果を世界に発表しましょう。

このリーフレットには、平成26年3月3日(月)に開催された「女性研究者のためのスキルアップセミナー」講師の富澤 康子氏をはじめ、今回のセミナーに参加した女性研究者へのインタビューや、研究者の卵である大学院生・学部生のみなさんへのメッセージを取っております。



発行：国立大学法人秋田大学男女共同参画推進室

〒010-8502 秋田市手形学園町1-1 電話：018-889-2260

<http://www.akita-u.ac.jp/coloconi/>

講師紹介



東京女子医科大学
心臓血管外科学講座
助教 富澤 康子 先生

Q ご経歴について教えてください

A 東京女子医科大学卒業です。
卒後は心臓血管外科の臨床をしていました。
現在は大学の同じ教室で、臨床に重点を置いていたときにはできなかった研究をしています。研究生活をしていて突然、日本において女性医師支援や男女共同参画が必要な事に気づきました。そこで、日本女性外科医会（JAWS）の事務局をお世話しています。

Q どんな研究をされているのですか？

A 人工臓器である人工血管、生体材料、体外循環について、また、人工心肺を用いた体外循環の安全教育です。そのほか、女性医師支援として継続就労支援、復職支援、外科手術器具の人間工学的評価も行っています。
時間を節約し、研究者生活を楽にするためにできること、ITを活用・駆使して研究する時間を増やすことについても考えています。

Q 研究者になったきっかけを教えてください

A 両親が医学部をでていたので、それほど悩まずに医学部を選択しました。外科に興味をもったのですが、当時、女性外科医は少なく、学術集会に行っても、女性の参加者に会うことはほとんどありませんでした。
もともと研究が好きだったので、母の介護が始まったのをきっかけに、大学で研究中心の生活に切り替えました。研究費を自分で取ってこないと何もできないので、研究費の取り方を学び、それには学術論文がないと研究費が取れないことがわかり、必死に研究成果を発信しています。



Q 英語論文を執筆してきて苦勞された点は？

A 初めて英語の論文（症例報告）を書こうとしたとき、英語論文執筆の指導をしてくださる上級医師がほとんどおらず、どうやって書いたら良いかわかりませんでした。書き上げて英文校正者を紹介されましたが、専門領域が違い文法しか直してもらえませんでした。そのときは、起承転結のロジック、段落の組み立てが英語と日本語で違うことを知りませんでした。
英文校正者は、論文自体、カバーレター、査読意見の行間の読み、査読意見への回答まで校正してください、わからないことを日本語で説明してくださる方が最良であると思います。また、自分の冗談を理解してくださる、ユーモアが同じ種類の人だと本当に助かります。

Q 研究者を目指す大学院生・学部生へのメッセージをお願いします

A 人脈やネットワークは重要です。自分が知っている相手も自分のことを知ってくれているわけではありません。偉い先生が自分の顔を覚え、名前を呼んでくれ、自分の研究内容を覚えてくれるときまで、名刺を渡し、名刺をもらいましょう。名刺をもらったら、必ず、メールしましょう。“筆まめ”であると良いことがたくさん起こります。
また、インターネットが発達しても、自分の論文の別刷りを郵送しましょう。見栄えが勝負と思っています。論文はなるべくカラー刷りにしましょう。いつでも、自分の学会発表に使った図表を用いてプレゼンテーションできるように準備しておきましょう。学会発表することにより、今、何を研究しているか知ってもらいましょう。セミナー参加、研究室見学は知識を増やし、多様なネットワークをつくれますので、お勧めです。

女性研究者からのメッセージ

Q ご経歴について教えてください

A 最終学歴は、東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻 博士課程です。その後、東京大学大学院で助手として勤務し、福岡県立大学での助教授・准教授としての勤務を経て現職に至ります。夫と犬とおいしい日本酒に囲まれて秋田の暮らしを満喫中です。

Q どんな研究をされているのですか？

A 専門は人類生態学です。中でも栄養状態や健康状態を指標とした研究をしています。テーマは近代化によって変化する食にまつわる環境と、その変化が人間の健康に与える影響について、です。主なフィールドはパプアニューギニア、ラオスなどのアジア・オセアニアです。次はジンバブエか南アフリカ辺りを開拓する予定です。



日本赤十字秋田看護大学・大学院
看護学部・看護学研究科
教授 **夏原 和美** 先生

Q 研究者になったきっかけを教えてください

A 私は高校生の時に不登校でひきこもりとなり、卒業に5年かかりました。高校は進学校でしたが一般受験をするのが嫌で美術系に進みました。でも結局中退し、デザイン会社で働きながらインドに行く生活を続けていました。その中で日本以外の国の人びとと関わる仕事がしたいという想いが強くなり、26歳の時に学びなおすことを決めて受験勉強をもう一度することになりました。そんなこんなで、ひとよりだいぶ遅れて研究者の道に入りましたが、回り道の経験は何かと役に立つと実感していますし、意志ある学びになったことは、かえって良かったかもしれません。

Q 英語論文を執筆してきて苦労された点は？

A 大学生の頃は英語の論文を読むのとにかく時間がかかりました。独特の言い回しや専門用語などの蓄積ができるまでは相当苦労しました。修士課程で初めて英語論文を書くのも、手紙より長い英語なんて書いたことがなかったので、普段から使えそうなフレーズを見つけると「こういうことを言う時に」というファイルに打ち込んでためておきました。

文献収集はネットでダウンロードできるようになったことでだいぶ楽になりましたが、所属大学によっては図書館で手に入る論文が限定されてしまうことで苦労しています。

Q 研究者を目指す大学院生・学部生へのメッセージをお願いします

A 研究スタイルは指導教官や講座の先輩から学ぶことが多いと思いますが、それは言わば文化のようなものです。自文化至上主義では他の研究者とのコミュニケーションは成り立ちません。学生のうちから、学会や勉強会などで指導教官以外の研究者や異分野の研究室に属する学生と話をする機会をたくさん作り、「ふつう」にも色々あることを知っておくと、研究者として生きていくための視野も人脈も広がるのではないかと思います。



秋田県立大学
生物資源科学部 生物生産科学科
助教 曾根 千晴 先生

Q ご経歴について教えてください

A 最終学歴は、岡山大学大学院自然科学研究科博士後期課程です。その後、独立行政法人国際農林水産業研究センターで研究助手として勤務し、2013年4月より秋田県立大学で勤務しています。

Q どんな研究をされているのですか？

A アフリカでのイネ生産を向上させるために、アジアイネ (*O. sativa*) とアフリカイネ (*O. glaberrima*) の種間交雑イネNERICAの低肥沃かつ塩土壌における生産阻害要因の解明について研究を行っています。また、アフリカにおいて農家の経済的および労働力の負担が少なく、持続的に行える稲作体系の確立を目指したプロジェクトに参加し、イネにおける冠水抵抗性の品種間差異に関する共同研究を行っています。

大学院在学中に農林水産省が実施する若手海外派遣制度を活用し、NERICAの開発を行ったCGIAR (国際農業研究協議グループ) 傘下のAfrica Rice Center本部 (ベナン共和国) に2か月間留学し、現在もガーナ共和国で共同試験を行っています。

Q 研究者になったきっかけを教えてください

A 小学校の時の夢は植物学者ですが、大学に入学する際には自分の実力を考えて研究者になれるとは全く思えず、何か植物関係の仕事に就きたくて作物学の研究室を選びました。先に理系で学んでいた従兄の影響で、学部入学時より修士課程への進学は考えていました。しかし、実際に博士前期課程 (修士) に進学後、修士で卒業して就職する場合の研究に打ち込める期間の短さに愕然とし、もっと研究を続けたいと思い、博士後期課程への進学を決心しました。幸い大学入学後より生活費は日本育英会の奨学金でほぼ賄っていただけだったので、進学してもあまり親に負担をかけることはないと思えたことも大きかったです。ただ、周囲の優秀な博士課程学生が就職に苦労する姿を見ていましたので、卒業後に就職先が決まらなければどんな職でも探そうと決心して、博士課程に進学しました。そんな学生でしたので、指導教官や前職の上司をはじめ周囲の方に恵まれ、大学院卒業後、こうして現職まで研究に関わった仕事を続けてこれたことは本当に感謝しています。

Q 英語論文を執筆してきて苦労された点は？

A 研究内容が、海外の方が研究数が多い分野でしたので、英語に対する苦手意識を乗り越えて文献を読み進めるのが大変でした。英語論文を書く際にも、やはり英語で苦労しています。英語以外では、統計解析に苦労しました。自分と同じ研究分野を使って統計処理を解説してくれている参考書はほとんどありませんし、高価な統計ソフトは買えませんでしたので、先生や学会の先輩方に聞きながらほぼ手探りで手法を覚えました。

Q 研究者を目指す大学院生・学部生へのメッセージをお願いします

A 学生時代に読んだ本で、研究者を目指すのに一番重要なものは精神力、のようにならなくていいと納得した覚えがあります。一般的な研究者を目指す道では、まず博士号を取るのに、ストレートで27歳までかかります。その間に学部や修士卒の同級生たちは、社会で着々と働いていっている。その状況に動じず、臆せず、自分のテーマを追求していくある意味図太さは、確かに必要だと思います。研究者を目指していると、出口の見えない袋小路に迷い込んだような気分になることもありますが、自分の興味のある研究を行える楽しさは何ものにも代えられません。頑張ってください。

Q ご経歴について教えてください

A 秋田大学医学部医学科卒業です。
卒業後、皮膚科医としてキャリアをスタートしました。その後National Institutes of Healthに2年9カ月研究留学しました。アメリカで長男を出産後も、研究を続けましたが、仙台に帰国後に次男の出産もあり一時離職を経験しました。10年前に秋田に戻り、フルタイムで復職しました。現在は皮膚科医としての臨床のほか、ちょこっと実験をしたり、医学教育やキャリア教育にも携わっています。



秋田大学 医学部
総合地域医療推進講座
准教授 **蓮沼 直子** 先生

Q 研究者を目指す大学院生・学部生へのメッセージをお願いします

A 特に臨床中心に仕事をしていると、研究は別世界のようを感じるかも知れません。でも臨床研究という分野もありますし、なにより研究をすることで、論理的思考や仮説→検証といった考え方のトレーニングの良い機会にもなります。臨床の場でも役立つ研究者の視点を得られるのではないのでしょうか？実験の楽しさや面白さ、もちろん大変さもありますがぜひ経験してみてもいいかもしれません。私にとって実験中は無心で手を動かす時間でもありました。研究や留学など質問があればいつでもご相談くださいね。





秋田大学 教育文化学部
准教授 **松本 奈緒** 先生

Q ご経歴について教えてください

A お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒業後、筑波大学大学院博士課程（5年一貫）で単位取得満期退学しました。その後、東京福祉大学での勤務を経て、現在は秋田大学教育文化学部で勤務しています。2009年～2010年に大学の研究支援制度で米国での8カ月の在外研究を行いました。

現在は単身で体育科教育、舞踊教育学の教育、研究に従事しています。平成25年度秋田大学優秀女性研究者賞を受賞しました。

Q どんな研究をされているのですか？

- A**
- 1) モーションキャプチャを用いた舞踊動作学習支援システムの開発と評価
 - 2) 米国のムーブメント教育論についての理論的基盤と運動の巧みさの改善や認知についての研究
 - 3) 体育科教育についての実証研究、アンケート調査
 - ・体ほぐしの運動の事例研究
 - ・中学校教諭対象のダンス領域に対する問題意識の研究
 - ・教育実習生の教育実習に対する省察研究

Q 研究者になったきっかけを教えてください

A 幼少の頃からダンスが好きで、ダンスに何らかの形で一生関わっていきたいと思い今の仕事を選びました。大学で職を得る大変さに躊躇した時に、同業の母から「大学の職は一国一城の主みたいな所あるからね。」と声をかけてもらいました。専門家として自分の仕事を自分の責任で行う、仕事（研究）の目標も自分で決定し自分で達成していく、そういった大学職の特徴に魅力を感じています。

Q 論文を執筆してきて苦労された点は？

A 卒業論文では、自分のやりたいテーマは決まっていたのですが、目的の絞り方やそれを具体的にどのように進めたらよいか分かりませんでした。今思うと、先行研究をもう少し丁寧に検討し、方法や手順を決めていけば良かったと思います。

また、大学院で博士論文として選んだテーマが、日本で研究を行っている人がおらず、そのテーマについての情報が入りにくかったことです。現在も引き続きそのテーマの研究を続けているのですが、たとえ時間がかかっても、またその文献的、人的リソースが遠い外国にあっても、あきらめず追いたいテーマを追っていくことの大事さを感じています。

Q 研究者を目指す大学院生・学部生へのメッセージをお願いします

A これが好き、これが得意、これに興味があるという気持ちを大切にしてください。その延長線上に長い間追っていきたい研究テーマや自分のプロジェクトがあると思います。

Q ご経歴について教えてください

A 日本獣医畜産大学（獣医学科）を卒業後、東京医科歯科大学大学院（博士課程）に進みました。

その後、動物衛生研究所、自治医科大学での勤務を経て、現在は秋田大学バイオサイエンス教育・研究センター 動物実験部門で勤務しています。



秋田大学
バイオサイエンス教育・研究センター
動物実験部門
助教 **池田たま子** 先生

Q どんな研究やお仕事をされているのですか？

A ES細胞/iPS細胞におけるERas遺伝子の機能解析について研究しています。秋田大学での主な業務は、動物実験施設専任教員・管理獣医師として、実験動物の飼育管理、施設利用者（研究者や実験補助等）・技術職員等の指導と管理運営に係わる業務等を行っています。また、講義をすることもあります。

Q 研究者になったきっかけを教えてください

A 将来が決められず迷っていた学部学生だった頃、他講座の尊敬していた先輩女性研究者（准教授）に、「このまま、どこにも出ない（自分のいる大学）と井の中の蛙になる。外（他大学）に出なさい。そして、外から客観的にものをみられる人（女性）になりなさい。」と云われた事がきっかけです。卒業後、学外に出たら、学位が必要になり、そのまま研究者の道へ進みました。

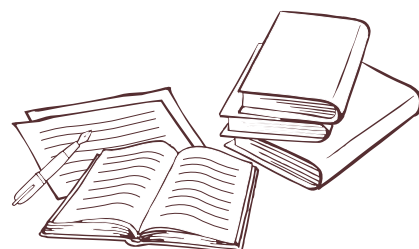
Q 英語論文を執筆してきて苦労された点は？

A 私は、英語が本当に大の苦手です。“第二次世界大戦で日本が勝ったら、公用語は日本語だったかもしれないのに”と本気で思っている位です。でも、それは科研費や公費・助成金の申請を書き始めた時に、日本語もできなかったからだ、と、しみじみと感じています。（いまでも？）

英語の論文は、添削を受けた物を見ると、自分の書いた文章があまり残っておらず、精神的に打ちめられています。もう、こればかりは…経験を積むしかなさそうです。

Q 研究者を目指す大学院生・学部生へのメッセージをお願いします

A 研究とは、未だ判っていないテーマに対して、自分の能力と様々な方法・手法を元に、発見していく事だと思っています。しかし、研究は、失敗や自分の仮説に対し否定的なデータが大半です。その度に、凹み、心にダメージを受けます。だからこそ、精神的に強くないと、困難に立ち向かえません。心が折れてしまわない様に、余力を残しながら頑張ってください。



男女共同参画推進室長からのメッセージ



「女性研究者支援コンソーシアムあきた」参加機関には、さまざまな分野の研究者がいます。

“英語論文”をキーワードに開催したスキルアップセミナーでは、講演と交流会を用意いたしました。学際的研究への眼差しが熱い今、異分野の情報を得、方法論を共有することで、おもいがけないアイデアが生まれるかもしれません。

本リーフレットを手にとっていただければ嬉しく存じます。

秋田大学 男女共同参画推進室長

渡部育子

実施レポート

平成26年3月3日(月)16時より、秋田大学大学院医学系研究科 医学系研究棟において「女性研究者のためのスキルアップセミナー 英語論文の書き方：考案のロジック」を開催しました。

当日は、東京女子医科大学 心臓血管外科学講座、助教の富澤 康子氏を講師に迎え、学内の女性研究者はもとより、男性研究者や秋田県内の他大学や研究機関の研究者の方、研究者を目指す大学院生、学部生の参加が多数ありました。

英語論文の抜けの少ない考案を「考案箱」を使用して組み立てる手法や、文献管理ソフト等ツールの使用法をはじめ、英語論文を書く上で欠かせない点を教えていただきました。

セミナー後の交流会では、参加者はお互いの研究内容について話したり、情報交換をして交流を深めていました。また、講師の富澤氏に質疑応答では質問しきれなかった点について熱心に質問し、アドバイスしてもらった様子も見受けられました。

参加者の声

★ 学生だし、論文について何も知らないし、初めは参加を迷っていましたが、参加して本当に良かったです。参加してみて、分からないことをそのままにしているのはだめだということに気づくことができました。これは「論文を書けないのは書き方が分からないのではなく、研究ができないだけなのだ」という先生のお話を伺ったからだと思います。また、英語論文は、日本語で書いた論文よりも広く世界で読んでもらえることに魅力を感じました。

セミナー後の交流会にも参加させていただきましたが、先生とも直接お話する機会を持つことができ、貴重な時間となりました。
(秋田大学医学部1年 江頭 朗良さん)

★ 先生のお話がおもしろく引き込まれました。

文献管理の方法、ソフトの活用法など参考になる内容でした。
(秋田大学 教員)

★ 具体的なツールの使い方や、利点、欠点を教えて頂けてよかったです。

(秋田大学医学系研究科 大学院生)